諸魚改場所（宛）

覚

一 鯛 四十
一 同 四十
一 目 四十
一 同 二十
〆 百四十

右ハ当浦中吟味仕候処書面之通御座候此段御断申上候
以上　但諸魚改場へ持参売渡候

寅八月十日　役人中印

御浦奉行
江藤源助殿
浜野茂□殿　両人へ差出

（以上）

筆者住所"南海部郡鶴見町羽出浦

（註）この資書には進上の記載文字もなく、且つ宛名も御浦奉行でなく諸魚改役所になっている。察するに文面にあるように、内々で内済にして貰うように、先ず諸魚改場所に、内々様々消しを頼みこんだものであろう。

宇目町水が谷を訪うて

（羽柴　幹事）

去る十月十四日、水が谷焼きたずねて大分合同の大友記者を団長格に、数名のものと共に四台の車で出かけた。且て耕作岸縁紛争の古文書が出た矢野貞馬氏が、快く案内して下さった。金跡はたしかにあり、暴風によって釜の中で使った道具や焼物の破片など多数が出た。しかし旧藩政時代のものでなく、明治二十年ごろ三重町の某の投資で、伊予里から技術者を入れて焼いていることをつかんだ。又いわゆる水が谷焼を数点拝見した。

耕山が矢野家の庭先から東南に高く仰がれ、十戸ばかりの農家とあたりのたたずまいは、古い交通路としての歴史を秘めて至極物静かであった。

資料と研究

佐伯と国木田独歩（十）

私立鶴谷学館　会員　山本　保

「散かざるの記」の一部を掲げます。

明治二十六年十月二日

午後三時鶴谷学館に行き幹事諸氏と学課の事に就き相談する所あり。

（註）九月三十日正午佐伯入りとし在独歩兄弟は、午後鶴谷学館経営主任中根祐紀宅を訪問。

十月一日　鶴谷学館経営主任山中盛次郎宅訪問。

十月二日　午前中、鶴谷学館長坂本永年と諸氏、鶴谷学館設立者毛利高策子爵邸訪問。以上挨拶廻り。午後鶴谷学館へ。そして幹事日置泉哉と話し合いをいたしました。

十月四日

秋雨蕭々（しょうしょう）として物寂し。

昨日始めて学舎に出席し、二十余名の生徒に向ひ、題詩並に初対面の詞を述ぶ。日課を定めて帰る。

十月五日

雨降ること蕭々たり。

昨日より始めて授業す。

（註）

① 鶴谷学館教師として赴任した独歩の、不安な心情（もつさびしさ）が日記の中ににじみ出ています。

② 佐伯志によると、この降り続いた秋雨のため大洪水となり、十月十四日を最高潮として、佐伯一帯の家屋の倒壊、橋の流失、人馬の死傷などもひどかったしく、独歩氏三回に亘って避難したようです。日記に其の時の天候をよく捉えています。

故中根貞彦翁著「風鈴」（昭和三四、二、四発刊）より

佐伯は戦前、航空基地で有名だったが、戦後は文化の興隆とともに国木田独歩の家郷で名が出るようになった。

独歩が一年たらず教職をとった鶴谷学館というのは、佐伯に中学校がないので、高等小学校卒業の子弟のために毛利家でやらせた小さい塾みたいなものであった。

教科目は英、漢、数の三科目だけ。独歩の前の英語の先生は久代孝次郎（クシロ）という、頭（ヒタイ）まで美髯（ビゼン）を蓄えた年配の風采のいい先生であった。わたしはバーレーの万国史を教わったと思う。数学の先生は、わたしの長兄より一級下の師範出の先生（石田豊城）で、代数を習った。漢文の先生（中島熊一郎）は剣道練達の元漢学者で、習ったのは十八史略ではなかったか。

わたしは明治二十六年の九月大分中学に進学したが、その直後に久代さんがやめたので、その後任の推せん方を養父（中根詫亀）から矢野竜溪先生にお願して、先生から指向けられたのが青年国木田哲夫であったのである。

近頃独歩の足跡探究が大はやりで、郷里（佐伯）の新聞をにぎわしている。

（註）② 前任者久代孝次郎は鶴谷学館初代英語教師、新潟県高田の人、慶応義塾（大学）出身。

矢野竜溪の推薦で東京から招かれ、月俸三十円で佐伯一の高給取りでした。年令三十四、五才。

後任教師独歩は東京専門学校（早稲田大学）中退、月俸二十五円、二十三才。町内二番目の給与所得者でした。いかに優遇されていたかがわかります。

鶴谷学館の教頭（独歩）は、当時の佐伯では有数の地位で、隠然たる別種の勢力と名望とを兼ね備えていました。

独歩が佐伯入りをした時、中根貞彦は すでに大分中学校に進学していました。

② 石田豊城は高等小学校長兼鶴谷学館塾頭でした。担当課目は物理、化学、数学。

御主出身者として、初めての大分県師範学校卒業生（明治十五年卒）東京在住石田清一氏の実父に当ります。

③ 中島熊一郎は佐伯切っての漢学者で、相当の年配でした。鶴谷学館での漢文の授業は、定期ランプの光の下で行なわれました。

この中島氏を中心とする保守派と、独歩を中心とするクリスチャン派とが校内で対立しました。

故小野茂樹著「若き日の国木田独歩」より。

初め佐伯町には尋常小学校（四年制）と、高等小学校（四年制）があり、その上に小学校卒業者に英漢数を中心とする中等教育を授けるための「南海中学」があったが、それが廃校となったため、それに代るものとして藩主毛利高範子爵が設けた私立学校が「鶴谷学館」である。明治二十三年頃開校された。

明治二十六年頃の鶴谷学館は、町内の新屋敷（現在中央区の、佐伯信用金庫付近）にあり、周囲には人家もなく、さびしい畑の中にあった。元製糸工場の古い建物を改造したものであった。裏手には内所川が流れていた。

設備は階上と階下とに黒板と生徒机、それに休憩用の畳が一枚ずつ敷かれてあるだけで、職員室も事務室もなく、教師は授業の時だけに来て、終ればそのまま帰るという風であったらしい。校庭も十坪ほどの狭いものであった。

しかし、ただ一つ、校舎の入口に掲げられた校札、「鶴谷学館」は、当時佐伯一の能書家とされた並河貝一という人が、紙一間、横一尺五寸の大板に墨太に文書したもので、これだけは校舎らしく光っていたと云う。

「独歩の日記」より

明治二十六年十一月三日

天長節にして学校は休みなり。午前收二と共に女為の野らに散歩す。日暖かにして小春の季節なり。

午後四時より警露館の宴会に出席す。毛利氏の師に聞かれしものなり。立食の饗応あり。土地の上級人士の集会なり、五六十名を超ゆ。

（註）① 鶴谷学館では、正月、学期始めに際、毛利高範公の私費で生徒たちを饗応することが行事の一つになっていました。うどん、鶏肉、饅頭、紅白餅、しる粉などふるまっていたそうですが、中でも、うどんは当時「しげうどん」という大阪流の多物うどんで、生徒は杯を重ねて食べたといいます。

② 大正、昭和初期にかけて、小学校尋常科卒業生の総代は、毛利賞の記念品（硯箱）と贈呈されるのがならわしでした。それをいただくのが、小学生最高の栄誉でした。

毛利高範子爵が教育に非常な関心を持たれていたことがうかがわれます。

富永徳磨の日記より

明治二十七年一月十二日

本日は鶴谷学館開業式のあるべき筈なりと思ひつきたれば、三時頃出で行きぬ。

毛利公を始め銀行会社の役員等已に在るも、生徒の業り甚だ少くして幹事の心配憐れに思ふれば、我、薬師寺（育造）を伴ひ来りて実に校に入りしは、式已に始まりて、公（高範氏）演説の最中なりき。

公の演説終れば高橋庸吉君、生徒総代として答辞あり、中馬（鑑一郎）先生の孝経の講義あり、日置泉幹事の祝文あり、生徒より及高橋君、石井敏一（紫水）、藤田建治郎、山口行一君等の祝文演説ありたり。

（註）この開業式当時、独歩は鶴谷学館冬休みを利用して、御建柳井町に帰省していました。翌日（一月十三日）夕方佐伯に帰任。翌十四日、毛利高範子爵、経営主任中根祚泉、幹事日置泉等へ挨拶のため参上しています。

故小野茂樹著「若き日の国木田独歩」より

生徒は総数が三十名余で、それが甲組（上級）と乙組（下級）とに分れていたが、その大半（特に上級生徒）は役場、銀行、裁判所、郵便局の事務員、小学校の教師などの職業人であった。

それで授業は午後から夜間にかけて行われていたわけである。夜学が終って帰宅するのが夜の十一時前後であった。

日課の一例をあげると、午後三時半から一時間、英語読本二の巻、四時半から一時間リーディングおよび古典（以上下級生）

夜八時半から一時間代数学、九時半から一時間万国史など（以上上級生）

右のように二部教授で、一週間二十三時間ほど（土曜日は昼間の授業だけであったらしい）であった。

独歩の前任者久代孝次郎教師の時から、学館の生徒が主になって「益友会」というものを組織していて、毎週土曜日ごとに会を催して、演説会と討論会とを交互に行ったり、「益友」という同人雑誌を出したりして、かなり活躍していたとの事である。

また、鶴谷学館生徒だった故石丸紫水も次のように語ってそうです。

氏は芳賀日本旅館から程近い鶴谷学館に通勤していたが、其頃は年も若いし、まだ書生気質の離れぬ時分で、風采などには更に頓着なく、木綿袴をば裾短かに穿き、ズテッキに編上靴といういでたちで、テクテクと通勤したもんだ。

城下の人々は、此の年若い教師の無頓着な風に少なからず驚かされたのである。

氏の前任者久代孝次郎氏は年配も氏よりは老け、世故に長けた風采家であって、紳士として土地の有望家に推されていた。

氏はこれと反対で、敢て有志家振らず、紳士気取りをせず、どこまでも書生流で押通した。

彼が学館に於ける熱心と意気込みとは大したもので、身をもって館生を撃い、力を子弟の誘掖に尽した。常に云う。「我輩はかくの如く勉強している。諸君も怠けてはいけない。共々に勉強の競争をしよう。君等は今日に修養して他日国家有用の材たれ。」と。

校風一時に起り、活気は学館内に溢れてきた。

他方、盛に英雄の伝記を読むことを奨励した。カーライルのヒーローウオルシップは特に上級生のために講義せられた。

さらに教壇上の独歩の印象を当時の教え子たちは次のように語っています。

故富永徳磨の思い出話より

二十三才の新進気鋭の先生が、英語を主として、ドイツ語、数学など博識をもって教え、特に英語の時間には、カーライルの英雄論や、スイントンの万国史を原書で講じ、中でも万国史はフランス革命の頃から始めたので、若い塾生たちは驚異の眼を見張った。

故河野誠の懐旧談より。

先生は授業中に生徒が、頭から「読めぬ」とか「知らぬ」とか答えるのを極端に禁じた。

読めぬ、知らぬは、いやしくも学ぶ者として実に無責任な言葉だ。「忘れた」と云うべきであるが、それにしても全部を忘れてしまうはずはないと云って、必ず読ませ、答えさせて、生徒の自主的態度を要求した。そして生徒が立って曲り なりにも真面目に読み或は答弁すると、先生は喜色を表わして熱心に指導した。

また先生は生徒の不勉強を強く責め、その覇気のないことを慨嘆して「佐伯青年は意気がない」とか「老人じみている」とかくり返し、時に「山に登らなければ宇宙の大は分らぬ」とか「山頂に立つとき、真の人生観が生れる」とか云って登山の功を力説したり、或はむつかしい宇宙や人間の問題について述べたりした。

そんな時には先生の左額に青筋が立つのが見え、そんな風だったから、先生の時間には何事か攻撃されそうで、生徒はつねに緊張していた。

（註）の鶴谷学館生徒

富永徳磨、長間　明、（並河）高橋平吉、山口行一、
蒔田重太郎、山口政策、長溝　　、岡村　誠、
武石素吉、高妻弘道、高橋庸吉、長間忠経、
飯沼吉三、関谷長治、日置貞夫、木村重樹、
山口有巳、千葉敬一、石九敏一、下川敏夫、
田中徹一、飯沼源治、長田稲城　聚屋武彦、など

② 独歩と交わりのあつた人々

薬師寺育造、横田稲太郎、薬師寺和子

③ 独歩の退職後は、蒔田賢哉が引き継いで英語を、また吉垣純が国語・習字を、中村岩太（高等小学校長）が数学を担当しました。坂本永年館長、中島羅一郎（漢学）はそのまま留任。

その後、校舎も山手区の田畑主倉庫（現在佐伯法務局）に変更され、そこで廃館になったそうです。

④ 明治二十八年、鶴谷学館は正式に私立学校として認可され、明治四十二年に廃校になったといわれています。

追記

独歩は情熱の教師でした。

彼は単に知識の教師、教材の教師ではなくして、自己の内面を吐露して生徒と共に行動し、自分の理想の世界に引き上げようと努力しました。

特に、独歩と同じキリスト教会員であつた数名の教え子との交渉は、文字通り親交そのものの間柄でした。散歩、登山、舟遊び、会食などをともにしている点は大いに学ぶべきです。所謂、師弟同行の実践者でした。

しかし、彼は当時二十三才の若冠、指導をうける上級生徒の大半が、同年輩か或は年長者でした。しかも職業を持っている生徒であるだけに、相当苦労したことでしょう。

後に独歩が佐伯を去るに当たって、四人の生徒（富永徳磨、長間明、並河平吉、山口行一）が彼を慕って、上京した一例をみても、その感化力のいかに大きかつたかがうかがわれます。

（参考資料）

鶴谷学館、その他の年表

安永六年	藩学を「四教堂」と改む。
明治四年	藩学「四教堂」廃止。
〃　六年	三の丸に「佐伯学校」開設。
〃　七年	四教堂跡に「鶴谷女学校」開設 長英（三洲）書「佐伯小学」の額を掲ぐ。
〃　九年	大分県師範学校設立
〃　十一年	鶴谷女学校を廃し佐伯小学校に統合。
〃　十二年	南海部郡教員伝習所を山際に設立。
〃　十四年	佐伯学校、旧藩主毛利高範公の援助をうけた。（五か年三、五〇〇円） 当時坂本永年学務委員 石田豊城大分県師範学校第一回卒業
〃　十八年	大分中学校創立
〃　十九年	南海中学校廃止
〃　二十年	郡立南海部郡高等小学校設立。
〃　二十三年	毛利公鶴谷学館を設け、青年子弟に中等教育をほどこした
〃　二十六年	中根貞彦大分中学校入学 国木田独歩鶴谷学館赴任
〃　二十七年	独歩、佐伯を去る。

明治二十八年	鶴谷学館が私立学校として正式に認可された。（坂井永年経営）
〃 四十年	大分県女子師範学校創立 南海部郡立准教員養成所開設
〃 四十一年	国木田独歩没す。（六月二十三日）
〃 四十二年	私立鶴谷学館廃止（一説には明治三十三年閉校）
〃 四十四年	南海部郡立佐伯中学校設立
〃 四十五年	佐伯町立実科女学校設立
大正 五年	南海部郡立中学校を県立佐伯中学校と改称 南海部郡教育会付属図書館を大手前に移し南海図書館と改称した。
〃 十年	郡立佐伯実科高等女学校を郡立佐伯高等女学校と改称す
〃 十二年	郡立佐伯高等女学校を県立佐伯女学校と改称
昭和十二年	石田豊城歿（七十四才）

（おわり）

随想

佐伯糞尿譚

―臭い話でいささか恐縮ながら――

会員　池田円作

明治末年の頃は、糞尿と厩肥が農家には主要な肥料であった。当時糞尿は、佐伯町の商家などから、大人一人一斗、小人一人五升宛の餅米を年末持参することを約して、これが入手に努めていた。之を称して屁餅という。そして村祭には親類同様、祭餅を持参、招待していた。

昭和の初期には、満洲から大豆粕が大量に輸入されるようになり、家畜の飼料や肥料に用いられた。硫酸アンモニア、過燐酸石灰が盛んに施用された。

この頃、佐伯町周辺の農家の間には肥料組合が結成され、中村の勝田某が組合長に選ばれ、組合には新たに規約が出来た。

一、屁餅に関する糯米持参の件は廃止。
二、汲取の際に持参するものは野菜に限る。
三、他人の汲取先の横どりを禁ずる。
四、汲取桶には必ず蓋をすること。

昭和二十年頃には、肥料桶一荷（三十六リットル入）につき五十銭を頂戴していた。又車を利用して汲取り、それを農家の肥溜に運搬して、双方から金を貰うという商売人もあった。

町の肥取に糯米を年末持参を切り換えて、耕地の広い蛇塚部落の間では浦辺の肥取りを計画し、八尊の肥取船を作り、底の直径四十二糎、深さ五十五糎、三十リットル入りの桶を用意し、観見町の松浦から丹賀、捉寄方面まで出かけ、大たご一杯に付麥一升五合と交換していた。中には海水を入れたもの、木灰を入れ急拵えのものもあった。斯様な粗悪ものは商談は成立しなかった。

この大たごには制限はなく、磯爺さん所有のものは一まわり大かった。欲と二人でかついだものといわれていた。

かつて郡農会の佐藤技師が、

「ここは蛇塚　向いは女島
中をとりもつ　ウンコセン」（事本節替歌）